

基調講演 1

変化するグローバル化と
製造業における付加価値の源泉の進化

リチャード・ボールドウィン

皆さん、アメリカ人といえば、まず話の最初にジョークを言うものだと思っていられるでしょう。一方で日本人といえますと、話しはじめるときに、「すみません」とお詫びの言葉から始めると

思います。まず私は全くジョークがないということでお詫びすることから始めたいと思います。多少、私の「ジョーク」、分かりましたでしょうか。

私の今日のプレゼンテーションの目的を二つ申し上げたいと思います。一つ目は、皆さんのグローバル化に対する考え方を、最終的にグローバル化と、二つのプロセスだと考えていただければと思います。二つ目は、このグローバル化の進化における「良い仕事」

「悪い仕事」ということについて、どのような意味合いを持つのかについて振り返ることです。

●グローバル化の変化を理解する三つのヒント

一九九〇年あたりからグローバル化が言えます。一八二〇～二〇一二年の時代、グローバル化というのは、経済的な活動が先進国つまりG7の中で集積していくということを示していました。

その後、別なことが起こりました。一九九〇年代の初めから、世界のGDPに占めるG7の割合が、一九〇〇年代ぐらいのレベルへと急激に下がってしまったのです。この全体のプロセスを単に一つのプロセスであると見ることはできません。グローバル化と

プロセスであるとみななければいけないのです。

グローバル化でどのような変化が起こっているのかを理解するために、特に三つのヒントについて、お話しします。

一つ目の鍵は、一九七〇～二〇一〇年のグローバルな製造業の割合です。ここで重要なのは、大きな製造業が、G7という七つの負組から七つの台頭組へと移行していることです。特に中国が台頭組の筆頭です。韓国、インド、インドネシア、タイ、トルコ、ポーランドといった国々でも、製造業におけるGDPの割合が〇・五%上がっています。しかし、それ以外の世界はほとんど変わっていません。グローバル化のプロセスにおいて、製造業が大きく変わっているのですが、それが影響を与えているのは一部の国だけである、つまり、ある一定の地域においてのみ影響を及ぼしたことが分かります。

二つ目の鍵は、貿易投資政策が変わったことです。つまり、保護主義が破壊主義になるということなのです。一九九〇年代、多くの発展途上国は保護主義は貿易や投資政策において、自分たちの産業を損なっていると感じました。一九九〇年代後半からBIT(二国

間投資協定)の締結が急速に拡大しています。発展途上国が投資を誘致しはじめたのです。

その一方で関税をみてみましょう。一九九〇年代の半ば、発展途上国は一方的に関税を削減しており、今は一律にどの国も低いという状況です。このグローバル化の変化によって、発展途上国の保護主義に対する見方というものが変わったということが分かります。

三つ目の鍵は、「スマイルカーブ」です。「スマイルカーブ」は、生産過程における付加価値の構造を表した曲線。研究開発や設計などの上流部門、販売・アフターサービスなどの下流部門は、付加価値が大きい。一方で、部品や素材の標準化が進んだ製造・組み立てといった中間部分は付加価値が小さい。全体として見ると、付加価値の曲線が人の笑った口元に似た形になる。これによって、一つの製品に対する付加価値の見方が変わってきました。さまざまな製造の段階を生産前、生産、生産後という三つの段階に分けています。一九七〇年代、一九八〇年代の状況ですが、三つの段階すべてほぼ等しく三分の一ずつです。一九九〇年代の後、生産における付加価値が下がっています。その

一方で、両側（生産前・後）では上がり、道化師のようなスマイルが生まれているのです。政策や製造の場所が変わるに従って、このようなことが起こったのです。

●新しいグローバル化の見方

ここで新しいグローバル化の見方を考えていただきたいのです。つまり、グローバルゼーションは一つではなく、二つのプロセスであるということなのです。

三つの種類のコストに分けて考えてみます。まず財・モノの貿易費用、二つめが通信費用、三つめが対人コストです。基本的にこれはモノ、アイデア、そして人を動かす際にかかるコストになります。グローバル化の前は、これらすべての費用は高く、それによって生産と消費が地理的に一つの場所に集中していました。グローバル化の前、すべての地球上の人間は地産地消でした。というのも、モノを動かすのにあまりにもコストがかかり過ぎたからです。

一八〇〇年代に産業革命が起こります。これによって、モノ・財を輸送する費用がかなり下がりました。これが最初のアンバンドリングです。モノを出荷するコストが安くなったのです。したがって、

消費地よりも遠いところで生産することが妥当なことになりました。

そして、生産に長けたところで生産することになりました。消費と生産の場所が離れたために、貿易が拡大しました。そして、各国が特化、分業するようになりました。

しかし、ここで逆説があるので。国際的には生産が分散しましたが、ローカルでは集中したので。工場あるいは産業は、ある地区に集積することになりました。

次に、この工場を簡素化された生産のプロセスとして見たいと思います。ステージAとステージBとステージCという生産の段階があるとしています。そこではモノや情報、トレーニング、ノウハウ、資本などが、複雑な形で、また調整の取れた形で双方向に動きます。

二つ目のアンバンドリングは、工場がアンバンドリング化されるということなのです。ICT革命によって、通信のコストが急速に下がりました。それによって複雑な活動を違う場所に立地させることが可能になりました。その結果、

ある国の非熟練工、安い労働力を使うことになったのです。ですの、ステージCは別の国へと移動する、つまりこれが二つ目のアンバンドリングになります。

そしてもうひとつ、このグローバル化によって全く違うものが見えてきているのです。すなわち、

要素が国境を越えているということとです。モノの情報の流れが、以前は先進国の工場の中で起こっていたのが、今は世界的に起こっているのです。特にノウハウについては、日本の労働者はノウハウを持ち、ある集積地で生産性が高

かったわけですが、そういったノウハウが、タイの労働者と共有されるということが起こっています。つまり、グローバル化の性質が根本的に変わったと言えます。貿易

はより複雑になっており、より相関関係があります。モノや人、知財、部品などがすべて動くようになったわけです。

グローバルゼーションの大きな基本的な違いですが、まず、貿易というのは、モノが国境を越えるだけではなく、工場も国境を越えていきます。国際商取引がもっと複雑になり、より相互的な関連が深まっています。モノ、サービス、

ノウハウ、資本が新しいビジネスの創造につながってきます。特にこのノウハウの部分が国境を越えるということがすべてを変えてしまいました。企業や工場の中に限られていた技術が国境を越えてい

るのです。これが意味するのは、

産業上の競争力が国に依存しなくなったということとです。昔は日本のハイテクと中国の低賃金が、ドイツのハイテクとポーランドの低賃金と競争するという構図でした。

しかし、もはや日本対ドイツという構図ではなく、むしろ中国、ポーランドという組み合わせによって競争力が決まってくるのです。地域の競争力ということと

工場をその国に誘致するということが、成長のファーストレインに辿り着くことのキーになっていきます。これは産業化にとって良いと考えられていました。

グローバルゼーションの影響は突発的で、個別的で、予測不可能で、そしてペースは政府によって制御できません。簡単に説明すると、まず突発的という意味は、生産の段階のオフショアリングは民間企業の意思決定によるもので、急に起こるといふことです。

個別的という意味は、分解度が上がったグローバルゼーションが起こっているということです。昔のグローバルゼーションは、セクター・バイ・セクター、つまり分野ごとに起こっていましたが、今起こっているのは、業種ごと



スでオフショアリングが可能になりました。もっと個別的になったのです。

そして、予測不可能ということですが、例えばデパートではレイアウトが生産性を決めます。しかし、どういったレイアウトが最も生産性が高くなるのかを知ることができません。同様に、現在のグローバルゼーションは、予測することが非常に難しくなっています。そして、制御できないということですが、以前は一国の政府が関税

を引き下げることによってこれを行ってきました。関税を徐々に引き下げることによってこのペースを制御できたわけですが、情報通信技術の発展によって、政府による制御ができなくなっています。

●スマイルカーブで付加価値を考える

それでは二つめのトピックに入ります。付加価値の進化はどういった意味を持つことになるのでしょうか。スマイルカーブに

フォーカスして、製造のサービス化についてお話ししたいと思います。ネイティブスピーカーでも発音が難しいですが、serviceと「ification」の「servicification (サービス化)」といいます。これは日本ではあまり聞き慣れないテーマですが、ヨーロッパでは注目を集めています。新しいコンセプトですので、まずは製造のサービス化とは何なのかということをお話ししましょう。

生産物、投入財の分野があります。例えば生産物として扇風機があります。それでは、どのくらいの付加

価値がこの扇風機に付加されているのでしょうか。違った見方をすれば、その付加価値の源泉はどの分野から来ているのかということ。投入財のセクターを見てみましょう。一次産品のセクターがあります。そして製造があります。さらにサービスがあります。扇風機に使用される一次産品は銅や石油です。これは付加価値の一部になります。製造ですが、プレス加工、溶接があります。そしてサービスの分野では設計、小売り、輸送等があります。これらすべてのものが付加価値の源泉となっているのです。そして、扇風機が生産物として作られます。つまり、この付加価値の源泉というのは、投入財の分野にあるのです。

投入財の分野は人が労働しているところ。モノが輸出されるということ。以前はモノ自体にフォーカスが当てられていました。しかし、それが変わってきました。日本の輸出は製品がほとんどです。アジア国際産業連関表を使って、一九八五年と二〇〇五年の付加価値を比較してみました。一九八五年、日本の輸出品の付加価値は、サービスセクターから来ているものは一三%、製造から来ているものが八〇%でした。これは製品な

ので、製品分野から来る付加価値が八〇%というのは理解できます。しかし、二〇〇五年を見てみると状況が変わっています。付加価値の源泉は、サービスが二九%と二倍になっています。このことから、日本の輸出品はサービス分野で価値が付与されているということになります。つまり、モノだけにフォーカスを当てると、このサービスの部分を見落とすまい

一九八五年と二〇〇五年の比較によって、付加価値の源泉がどう変わってきているかが分かります。ここで三つのセクターを結んでスマイルカーブを見てみましょう。一九八五〜二〇〇五年は、一次産品がマイナスです。そして製品部も付加価値のシェアが一次産品以上に減っています。サービスがプラスです。これはスマイルカーブに似ていますが、片方が少し高いので、ひきつった笑(smirk)にも見えます。ですから、スマイルカーブと言った方がいいかもしれません。これはすべての国において、そしてすべての産業分野において起こっている現象です。

それでは、どうしてこのような現象が起こっているのか、どうしてサービス化が起こっているのか

についてお話ししたいと思います。進化的な理由と革新的な理由があります。進化的な理由は、まずアウトソース、つまり仕事の再分類です。例えばネスレのマーケティングマネジャーを一〇年間やった人が、自分の会社を立ち上げる。つまり、ネスレに対して同じ仕事をしていきますが、ネスレの従業員ではなくなっているわけです。これがアウトソースの再分類といわれるものです。

そして、サービスがモノ自体に組み込まれているということです。ソフトウェアが良い例です。これはアフターサービスにおいてもそうですが、サービスがモノ自体に組み込まれて、付加価値を提供している部分があります。そして、生産過程におけるサービスが、さまざまなサービスマネジメント、輸出、それがモノにすべて付加価値をもたらしているわけです。これは比較的緩やかに起こります。

もうひとつの革新的な理由というのは、これは第二次アンバンドリングと呼ばれるものですが、価格の変動にも影響を与えます。つまり組み立て、製造のコモディティ化、商品化ということです。第二次アンバンドリングは、ハイ

テクと低賃金の組み合わせです。これは製造がコスト安になります。しかし、サービスの投入財は安くありません。つまり、その価値がサービスの方に動いているということになります。複雑なことです。この源泉を分析しなければいけません。つまり、サービスの仕事はG7の都市に移っていて、製造の仕事が新興国の工場へ移っているのです。これは双方にとって懸念を抱かせる現象です。つまり、豊かな国は製造業が新興国へ移ることを心配し、新興国側は「悪い仕事」とらわれてしまう可能性があるという懸念です。

●政策への影響

それでは、政策にこれがどのような影響を与えるのかについて考えてみたいと思います。まず、基本的な考え方、オフショアリングは、日本で雇用を創出するか、あるいは奪っているのかということ。つまり、工場における仕事は移動しているわけです。多くの場合、製造業の付加価値にサービスが加わります。ですから、製造のオフショアリングはコストを下げていくことになります。その一方で、サービスマネジメント分野での雇用を創出していることになります。従来

型の統計では、この源泉、つまり、どこで実際にこの付加価値が付与されているのかということ。どこで雇用が創出されているのかということを見なければいけません。この場合はサービスマネジメントです。

そして、現実には目を向けると、日本の工場の労働者は、自国ではロボットと、海外では中国と戦っています。そして負けそうになっています。しかし、教育レベルが低い労働者に十分な雇用口がないというのがG7の国での実情です。

G7の国はこの現実を政策に生かさなければいけません。良い仕事は、製造や組み立てではなく、サービスの方にあります。雇用政策、産業政策にこれを反映させなければいけません。

秀逸で多様なサービスマネジメントは、新しい比較優位性につながります。私の好きな例ですが、ユニクロのファーストリテイリングという会社があります。日本がメンズのTシャツを輸出して、それで利益を上げるということを考えた人が以前にいたでしょうか。しかもユニクロは工場を持たないのです。ユニクロの経営者たちは、消費者を理解し、ヒートテックのようなハイテクのファブリックを使い、最

も生産性の高い、効率の良い方法を組み合わせ、適切な価格でモノを提供することによって成功を収めています。これがまさに秀逸で多様なサービスマネジメントです。

一歩先に進めて、政策の観点からこれを見ると、二一世紀の工場として、都市を使うことができるということ。ユニクロのようなサービスマネジメントの仕事は都市に集中する傾向があります。つまり、それが「良い仕事」、継続的な仕事につながっていくことになるのです。

私は、オランダ政府のグローバル化政策に関わったことがあるのですが、「オランダ2040」というポリシーができました。都市における低賃金の競争の問題に対する取り組みでした。都市が特化することにより、生産を分業することによって、秀逸で多様なサービスマネジメントを提供することができると。ですから、都市は住む場所だけではなく、サービスマネジメントを含めた生産の場所になるということです。そのような都市政策を考えなければいけません。

(Richard E. Baldwin / ジュネーブ国際問題高等研究所教授、オックスフォード大学教授)

基調講演 2

賃金労働・労働移動と開発

マーティン・ラマ

ありがとうございます。皆さま、こんにちは。この大変きれいな会議場に来ることができ、また、ジェトロ・アジア経済研究所、朝日新聞におかれましては、このようなお招待をいただきましてありがとうございます。かなり大変なのですが、頑張つて、今日はプレゼンテーションしてみたいと思います。今日、私がお話する問題が、先ほどポールドウィン教授がおっしゃったことと共鳴するものであればと思っています。

●本日の講演内容

私は、ここ最近、三つの作業を行ってきました。一つは、仕事に関する「世界開発報告」の作成作業でした。二つ目は、最近発表された「南アジア経済報告」の取りまとめで、南アジアにおける不平等に対応するというものでした。

これは雇用と移動、転職がどのようになんかの幸せに影響するかというものです。三つ目は、都市化に関する作業でした。南アジアの開発途上国においては、都市化がここ何十年の間、特に重要なことです。

そして、この三〇分を使って、皆さんに四点についてお話ししたいと思います。まず、この二〇一三年の「世界開発報告」についてです。この報告では、仕事の中心性ということに注目を置いています。仕事によって人々は貧困から抜け出すことができます。つまり貧困から人々を抜け出させることが、この開発の中において大きな課題となっています。多くの成果がありました。ただ、まだやらなくてはならない課題があります。ただ、開発途上国における仕事は、労働経済学者が考えるような先進国に

おける労働の需要や供給とは違うということ。二点目は、賃金雇用が大変重要な役割を果たすということ。つまり、賃金雇用といった場合には雇用主と被雇用者という関係があるわけですが、賃金労働といった場合にはフォーマルとは限りません。すなわち、契約や健康保険、社会保障があるとは限らないのです。三点目に申し上げたいのは、企業に関することとなります。企業の開発途上国における動き（ダイナミクス）について、一般的にお話ししたいと思います。特に中国というわけではありませんが、一般的に先進国と開発途上国では企業の動きが違ふということ。そして、都市雇用創出における牽引力になっているということ。そして、都市雇用創出においては、生み出されたいと思います。仕事は、十中八九は企業によって生み出されたいわれますが、開発途上国に関しては都市によって雇用が生み出されるということがあり、この点は重要になります。

●仕事の役割

最初に、仕事によって貧困から抜け出すことができるという点についてお話ししたいと思います。開発途上国においては、自営業、

農民や路上で露天商をやっているような人たちなど、労働所得が家計の主要な収入源になっています。次に、労働の活動形態について見てみましょう。先進国と開発途上国ともに、貧困から抜け出す際に仕事はその役割を果たしています。たとえば、送金などから賄っているノンレイバーの非労働的な活動による収入と比較して、労働活動で所得を得る方が、より多くの所得を得ることができます。先進国においては、労働活動によって所得を得ることが貧困から抜け出す主要な要因になる、ということが分かります。

開発によって、もちろん仕事は良くなります。「良い仕事」には二つの要素があります。どれだけ払ってくれるか、そして、健康保険や年金に対する付与率です。この二つには強い相関関係があります。社会保障の付与率は国によって違いますが、開発によって仕事は良くなるということが言えます。ただ、ここで申し上げたいのは、開発途上国における雇用といった場合にはいろいろなものがあるということです。コンピューターのあるデスクに座っているような人たちもいれば、アフガニスタンの通りの露天商や、ジャカルタの建

設労働者もいます。南アジアでは農業と自営業がそれぞれおおよそ三分の一の割合です。賃金雇用もやはり一つの役割を示しているわけですが、ともかく、発展途上国における仕事は幅広く、いろいろな種類があつて、いろいろな影響があります。

●賃金労働と労働移動、社会的移動

次に二つ目のポイントに移りたいと思います。ここで強調したいのは、賃金労働によって労働移動が促されているということです。

この労働移動というのは経済学上、いろいろな意味があります。労働移動というのは、ある場所から別の場所へ移動するという解釈の仕事もあるでしょうけれど、ここでは社会的な移動ということです。

貧困から脱却して、脆弱な状況から中間層に行くということです。比較的「悪い仕事」に見えたとしても、都市の仕事、特に賃金労働が、移動において重要な要素を示しています。この分析は少し難しいかもしれませんが。

パネルデータに基づき、同じ人を時系列でずっと追って、転職して貧困から抜け出したかどうかを見た南アジアでの調査があります

が、パネルの数が小さく、分析が難しい面があります。一つのパネル、一つのデータによると、息子の職業は父親の職業に関連しているというものです。下方の農業から、ホワイトカラーの上方へというような社会的な分類があります。この上方、下方への移動はどちらもありません。非熟練者はだいたいの上方へ移動します。その一方で、インドに関しては興味深いことなのですが、時間とともに移動の割合が増えていることです。

例えば、あなたがホワイトカラーであろうと、農業者であろうと、父親が何をやっているかに関わらないということです。若い世代を見てみると、移動性が従来に比べ柔軟になり、ランダムなモビリティになっています。つまり、父親が何の職業であつたか関係ないということです。以前は低カーストの人にとって、移動性は低かつたのです。しかし今では、上位カーストの人と同じぐらいの移動性になっています。したがって、仕事によって貧困から抜け出すだけではなく、別の社会的な排除を乗り越えることができているということを示しています。

移動性が高いアメリカとベトナムを基準として、インドとバング

ラデシユを比較してみました。①貧困から脱却する可能性、②中間層に動く可能性、③貧困に逆戻りする可能性、④中流階級から落下する可能性、の四つについてです。貧困者の絶対数は違うかもしれませんが、貧困層が貧困から脱却することについては、バングラデシユ、インド、アメリカ、ベトナムでは同じです。中流階級にいくと、そうとは限りません。貧困に逆戻り、あるいは中流階級から落下するなど、もつと悪い結果が出ています。ともかく、多くの移動性があるということです。

都市、そして農村に関して同じような研究をしています。都市において移動性は高くなっています。また、雇用のタイプも見ていますが、移動性に関していうと、賃金労働が大変重要だということが分かります。すべての仕事と同じではありませんが、仕事によって貧困から抜け出すことができるということ。この移動性を牽引しているのは、仕事、都市、そして賃金労働になります。

●雇用の創出と破壊

三つ目は、仕事のタイプをどのように見るのかということです。つまり「良い仕事」とは何なのか、

「悪い仕事」とは何なのかということ。 「良い仕事」はどこから来るのかということですが、まずエコノミストとして最初にすることは、そのダイナミクスを見ることです。雇用者を見るということです。

例えばアンバンドリング、地理的な分断化が起こりますが、それに関しては、途上国の経済について雇用の創出、破壊という観点からさまざまな研究が行われて、そのダイナミクスを分析しています。そして表面的には、この結果を見ると、先進国と同じような傾向が見られるということです。雇用の創出、破壊が、先進国でも途上国でも起こっているということです。「世界開発報告」の中で、企業から来るデータに関して正確なものがなく、先進国と違って途上国では非常にゆがんだ数字が出てきます。雇用状況は世帯の方がよく説明することができます。

途上国に関しては、途上国全体の企業の現状を捉えるような統計が今のところ入手できませんので、国の代表による調査を行い、世帯に対する調査、企業に対する調査を行いました。その分布ですが、世帯の調査から得られた数字、企業の調査から得られた数字を比較

しています。ドイツにおいては少し違う傾向ですが、世帯の調査も企業の調査も傾向的には同じものが出ています。雇用の破壊は、従業員〇〇五人の会社が一番多くなっています。しかし、途上国ではあるけれどOECD加盟国であるチリにおいては、世帯に対する調査では〇〇五人の企業が一番多いですが、企業に対する調査では一〇〇四九人が一番多くなっています。つまり、これは統計の数字がゆがんでいるということになります。零細企業の数を過小評価する傾向があり、零細企業が数に入られていないということですが、エチオピアのような国では、九三%が零細企業によって雇用されています。

労働の多様性を考慮に入れた生産力の格差ですが、これはTFP（総要素生産性）の観点から、それぞれ別の国がどれぐらいの生産性の高さをみます。TFPの一〇〇分位を取ると、一〇分位点に分布する企業（低生産性企業）の生産性に比して九〇分位点に分布する企業（高生産性企業）の生産性は、米国が七〜八倍、メキシコが二七〜二八倍です。つまり、途上

国の方が企業の生産力に歴然とした格差が存在し、メキシコに関しては、生産性の低いところで雇用されている労働人口が多いということになります。

そして、雇用創出がどこから来ているかということですが、それにもゆがんだ統計結果が出てきています。

チリの場合、企業の調査では、実際に規模ごとの分布からはどこが雇用を創出しているのかについてはつきりとした実像をつかむことができません。雇用の創出、破壊もそうですが、それを零細企業で行っているというのが現状なのです。しかし、例えばガレージで生まれたけれど急に大きくなったマイクロソフトのように、足が速く、目標を持って成長していくガゼルのような可能性をもった企業でもあります。途上国はマウスよりガゼルの方が多いいえます。また、権力を持っている人との関係が多く、それが影響を与えらるという傾向が途上国ではまだ見られます。

●都市における雇用創出

最後のポイントですが、都市とということに目を向けてみたいと思います。都市が雇用創出のエンジ

ンになっているということですが、例えば衛星から撮った映像や、さまざまなことを使って都市にどれだけのものが集中しているのかを調べてみました。実際に成長の原動力がどこから来ているのかということですが、インドにおいては、近々これがパブリックドメインの情報になることになっています。そして、経済活動が非常に活発なところと、そうではないところの差は何なのか、ということを決めることになります。

さまざまな指標がありますが、二つの指標を見ていきたいと思えます。一つ目の指標は生産性です。例えばある世帯の性格やサイズ、構成など、照明、電気の輝度で都市の活動を調べた衛星から撮った写真です。二つ目の指標は、実際にその場所がどのようなものになっているかということです。地方都市、そして都市部とありますが、小規模の地方都市と小規模の都市部にはあまり違いがありません。中国ですが、都市をつくると人がそこに移動します。大きな移動が起きます。それは秩序が整っていない状態で起こります。小規模の地方都市と大規模な都市

部の間には大きな違いがあります。しかし、最も生産性が高いのは小規模の地方都市の部分になります。このことについて南アジア全体を説明したいのですが、ここではインドを例にとつて説明したいと思います。クラスターごとに見ていきますと、都市のパフォーマンスの大きな決定要素となるのは、サイズであるのか、あるいはガバナンス形態であるのかということですが、州政府が置かれている都市は非常に強いガバナンスがあります。統計的な有意性を見てみる



と、ガバナンスのタイプには有意差がありますが、都市の規模には有意差がなく、都市のパフォーマンスは、都市のガバナンスのタイプが非常に重要であるということを示しています。そして、賃金労働は都市に集中し、都市のガバナンス形態によって都市の生産性、パフォーマンスが変わってくるということことです。ガンジス川のほとり、タージマハルがあるアグラは生産性が低く、不均等です。もう一つの極にあるのが、モディ首相の出身地であるグジャラートのスラットです。生産性は高く、均等性も高くなっています。つまり、都市にはマウスは少なく、ガゼルが多いということですが。

次にロケーションごとの分析を行い、都市の中心部とそれを取り巻く地域の関係を見てみます。二つの都市を考えてみたいと思います。デリーとバンガロールです。バンガロールはインドで最も近代的な都市の一つでIT産業が非常に発展しています。世界のエンジニアがクラスター化する、すなわち、そこに集まる都市になるということもあります。そして、生産性が非常に高い都市です。しかしながら、後で数字をお見せしますが、政府のサービスが多様化し、

分散化しています。ピケティの『二世紀の資本』という本がありました。これはインドというよりは、デリーの状況を説明したのになります。それでは、デリーとバンガロールの違いをお話ししたいと思います。小規模地方都市と大規模地方都市、大規模都市部と大規模地方都市というのがありますが、例えばデリーからの距離が一〇〇〜一五〇キロメートル離れたところでも、生産性はデリーとあまり変わりがありません。地方都市でもデリーの中心部と生産性があまり変わらないのです。

一方、バンガロールではデリーよりも、生産性は高くなっています。しかし、バンガロールからの距離が遠くなれば遠くなるほど、生産性が急速に落ちていきます。つまり、生産性が高い部分はバンガロールの都市部に集中しているということ。バンガロール自体は、まあまあエンジニアにとっては素晴らしいロケーションかもしれませんが、オランダもこのような都市をつくりたいと考えているかもしれません。このように都市を取り巻く地方都市の部分に関する交流も必要になってまいります。ですから、中国ほどではありませんが、この大変革が

都市政策にもたらす変化も十分に考慮しなければいけないということになります。ありがとうございます（拍手）

(Martin Rama / 世界銀行南アジア地域総局チーフエコノミスト)

